

## 庭の千草 / 二人のマリア

牧師 山本 護

伝道所の庭でいつのまにか増えているユリ、調べてみたら台湾原産の「高砂ユリ」。もしくは高砂ユリと鉄砲ユリが自然交配した「新鉄砲ユリ」でしょうか。感傷的な夏の終わりに清楚な花を咲かせるものですから、戦前の女学校から二部合唱で聞こえてくる「庭の千草(The Last Rose of Summer 夏の名残のバラ)」のような感じがします。

西欧のキリスト教では、ユリは聖母マリアの象徴。聖書に従えば、西欧絵画が描くマリア像や衣裳はあまりに非歴史的な虚構であることが分かります。人間マリアを聖書通りに描くならば、貧しい家庭で子たくさん、粗末な衣服、生活力ある二の腕逞しいおっかさんでしょう。おっかさんの逞しき、という点で「聖母」だとは思いますが。

「なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか(マタイ 6:28~30)」。

イエスが示したガリラヤの野の花とは、丘陵一面に自生する「マリア・アザミ」ではないかと言われています。可憐だが鋭い棘があって、不用意に触れると痛い目にあう。同じマリアでも、こちらはマグダラのマリア(ルカ 8:2)のことらしく、多くの棘が彼女に憑依した悪霊を象徴している。危険な棘が悪霊のごとく嫌悪され、牧草にもならない野草マリア・アザミ。炉に投げ込まれる忌々しい花が「ソロモン以上に着飾っている」という意味あいならば、いかにもイエスらしい角度のついた譬えです。

ユリの開花とほとんど同時期、伝道所林側の土手には棘痛きアザミも咲いていて、両者は風に揺られて懐かしい「庭の千草」を二重唱で歌っています。伝道所の表側は、逞しいおっかさんマリアのユリ。裏側は、数多の悪霊から解き放たれたマグダラのマリアのアザミ。女学校の清楚な少女たちは卒業し、やがてそれぞれのマリアになっていきました。喜ばしいような、つまらないような。二人のマリアを思い描き、「庭の千草」を小さく歌うと、夏の名残の感傷がいつそう深まりました。Ω

